

# 阪神タイガースの魅力についての考察 A Study of the Attraction of Hanshin Tigers

1K03B003-6 青山未奈

指導教員 主査 宮内孝知 先生 副査 石井昌幸 先生

## (1) 序章 動機・目的・方法

現在プロ野球は人気低迷の真只中にあるが、阪神タイガースの人気は衰えを知らない。では、なぜタイガースは大勢のファンから支持されるのか。本論文では「スポーツファン」に関する先行研究を用い、阪神タイガースファンがどのようなファンであるかを分析し、地元大阪独特の県民性・大阪の東京コンプレックスという社会学的な側面から考察していく。

## (2) 第1章 阪神タイガースについて

巨人から職業野球チームとしての設立を促され、1935年に誕生した大阪タイガースは、巨人と常に優勝争いをする強いチームであったが、常勝を続ける巨人とは対照的に次第に戦力が低下していく。1986年から2006年まで最下位に陥ったシーズンが10回にもものぼり、タイガースの次に多い横浜の5回を寄せ付けない弱さである。しかし、観客動員数を見ると人気の強さが伺える。2006年はシーズン2位で終わったが、優勝した中日と、2004年まで観客動員数1位を守り続けてきた巨人を抜いた。また、最近8年で5年Bクラスが続いても200万人以上の観客を動員し続けている。このタイガースの人気はどこからくるのであろうか。1つに甲子園球場という舞台があげられる。甲子園球場は春・夏と高校野球の舞台であり、野球人にとっては特別な存在である。また、甲子園一帯は「住」と「遊」が近接した楽園のイメージとして意図的に創り上げられたという独特の立地条件を持ち合わせている。甲子園球場はファンにとって、非日常的な「遊」を提供してくれる装置でもある。

## (3) 第2章 ファンという視点からみる阪神タイガース

タイガースの魅力と言及していくにあたって、「熱狂的であるタイガースファン」の存在は欠かせない。この章ではスポーツファンの定義、先行研究から阪神タイガースファンの特徴について述べていく。まず、スポーツファンの観戦動機には10個の要因があり、タイガースファンはそれの中でも「所属」という要因が大きいと考える。なぜなら、タイガースの地元大阪が、帰属意識が強い特異な土地だからである。また、タイガースファンは、昔からのコアなファンと2003年の優勝フィーバーから増えたカーニバル化したファン、つまりただ騒ぎたい・応援することによって他者とコミュニケーションをとりたいというファンの二

極化が進んでいる。では、弱いときも強いときもファンであり続けるコアなファンはタイガースの何に魅力を感じるのか。それにはやはり、地元大阪が深く関係していると考えられる。

## (4) 第3章 阪神タイガースと大阪

まず、大阪の県民性の1つとして帰属意識が強いことがあげられる。NHKによる全国県民意識調査によると、「大阪人だという気持ちを持つ」と答えた大阪人は72,9%(全国平均68,7%)、「大阪は他とは違う」と答えた人は53,8%(全国平均44,3%)であった。これより、大阪人は地元大阪を特別に思い、誇りを持っていることがわかる。しかし、首都を奪い損ねた過去を持っている大阪は東京に次ぐ第二の都市であり、東京へのコンプレックスが非常に強い。ところで、この東京コンプレックスは、メディアによる影響が大きい。メディアは洗練・安定の東京に対して、大阪は混沌と無秩序というイメージを植え付け、タイガースはそのイメージにあてはまる格好の材料として扱われたのだ。その結果、大阪のタイガースファンは、セ・リーグで他チームを圧倒する強さを持つ巨人を「東京」、常に負け続けているタイガースを「大阪」として捉え、東京に負けまいという気持ちをタイガースにぶつけることで、ますます熱狂的になったのである。

## (5) 第4章 阪神タイガースの魅力とは

阪神タイガースの魅力とは何か、ファンは何に魅力を感じるのかと言及していった結果、1つ目に非日常を提供してくれる甲子園球場という装置、2つ目に負け続けるタイガース、3つ目に「対東京」のわかりやすい象徴であったことがあげられる。そして、タイガースの最大の魅力とは、大阪の県民性である「帰属意識の強さ」とその帰属意識が生み出した「熱狂性」を持ち合わせたファンそのものであると考える。2003年のパ・リーグ優勝以降にファンとなったいわゆる「カーニバル化」されたファンは、「熱狂的なタイガースファン」と一緒に騒ぎ、感動できると思っファンになったのだ。つまり、新しい層のファンは昔からのコアなタイガースファンに魅力を感じ、タイガースファンとなりえたのである。